

江戸・東京 農業名所 めぐり



企画・発行

JA 東京中央会
東京都農業協同組合中央会

発売

[社団法人] 農山漁村文化協会



◆隅田川・神田やっちゃばに近い地の利を生かして

寺島ナス

墨田区東向島・白鬚神社

いま、寺島の名は、隅田川の東の墨田区東向島と八広に、小中学校名として残っているが、地名としては忘れられようとしている。向島百花園の近くにある蓮花寺あるいは法泉寺の寺領であったため、この付近が寺島村と名づけられたという説がある。もともと東の隅田川、北東の荒川などの水によって運ばれた土でできた地域で、「南葛飾郡誌」によれば、大正十年（一九二二）寺島村の水田面積は三八ヘクタール、畑五、六ヘクタールで、かなりの農地があり、とくに稲作が中心の地帯であったことがうかがえる。

水田地帯のなかの貴重な畑

しかし、日本橋から一里一八町（約六キロメートル）と近く、水運の便がよい

という好立地から、江戸の人口が増加するにつれて、生産の主体は米から収益の多い野菜などへと移っていった。水田では蓮根がつくられ、次いで多かったのがハナシヨウブで切り花として出荷されていた。また同じイネでも米を収穫するのではなく、正月用のお飾りに使うわらを目的としたミトラズ（実穫らず）という草丈の高いイネをつくり、青刈りしていた。いっぽう、少ない畑に対しては作付け希望者が多かった。農地を小作する場合でも、畑はその面積の三倍の水田と見做され、賃金が高いと見做された条件

寺島ナス

かつて、白鬚神社の周辺は寺島村といました。元禄郷帳（1688～1704）によれば、この地域一帯は、水田を主とする近郊農村でしたが、隅田川上流から運ばれてきた肥沃な土はナス作りにも適し、ナスの産地として、その名も「寺島ナス」と呼ばれていました。

享保20年（1735）の「続江戸砂子温故名跡志」には、「寺島茄子西葛西の内也。中の郷の先、江戸より一里余」とあり、「夏秋の中の嘉蔬とす。」また、文政11年（1828）の「新編武蔵風土記稿」には、茄子として、「東西葛西領中にて作るもの」として「形は小なれどもわせなすと呼び賞美す」と江戸近郊の名産であることが記されています。

農家は収穫したナスを船を使って、千住や、本所四ッ目、神田の土物店（青物市場）等に出荷していました。

江戸時代、悠々と流れる隅田川の東岸。田園地帯であった寺島に、後世に伝えるに値するナスの銘品があったのです。

設置場所：白鬚神社 墨田区東向島3-5-2

東武伊勢崎線東向島駅下車、すぐ左を直進、明治通りへ、東向島4丁目交差点左折、つきあたり右へ。鳥居あり。徒歩8分。

JA東京グループ

があつたが、それでも畑を望む者が多く、いかに野菜づくりが高収益であったかを知らなければならない。このため、条件が許

せば水田は埋められ、畑地化していった。野菜の種類は明治後半から大正時代に

に変わった。

説明板のある白鬚神社の北西約四〇〇

水田地帯のなかの貴重な畑
しかし、日本橋から一里一八町（約六
キロメートル）と近く、水運の便がよい

があつたが、それでも畑を望む者が多く、
いかに野菜づくりが高収益であつたかを
知ることができる。このため、条件が許



安政3年の寺島村、白鬚神社（中央）周辺の地図。左は隅田川、右には向島花屋敷
（エーピーピーカンパニー CD-ROM『江戸東京重ね地図』より）

地を小作する場合でも
の面積の三倍の水田といっしょ
でないと言えないといった条件

せば水田は埋められ、畑地化していった。
野菜の種類は明治後半から大正時代に
かけて次第に多くなり、大正十年（一九
二二）ころには三〇種類近くにも及んだ。
おもなものは漬菜・ナス・ネギ・亀戸大
根・京菜・コマツナ・シロウリなどで、
とくに多かったのが漬菜とナスである。

名産ナスの産地に、花の名所

説明板に書かれているように、江戸時
代の中ごろにはすでに、ここでナスが栽
培されていて、そのころはさまざまな形
のナスであつたが、江戸時代後期の文政
（一八一八〜三〇）のころには、小型で
早生のものに整えられた。早どりが高価
なことから、早生化がすすめられていっ
たことがわかる。そして、ここに近い砂
村（江東区、60頁）のように、寺島でも促
成栽培が行なわれたことが想像される。

この地域には、大正時代の終りころは
まだ野菜畑が残っていたが、関東大震災
以降は急速に都市化されて、工場や住宅

に変わった。

説明板のある白鬚神社の北西約四〇〇
メートルの所に、隅田川にかかる白鬚橋
がある。この橋は、昭和五年（一九三〇）
の竣工であるから、寺島ナスと入れ替り
にできた橋ということになる。白鬚橋
の位置は、武蔵国と下総国の渡しのある
場所といわれる。高い堤防の上にかか
っているため付近を見渡すことができる
が、かつてナスなどが湿り気の多い畑で
栽培されていた情景が、うそのような街
並みである。

白鬚神社から東二〇〇メートルほどの
ところに、都立向島百花園がある。『江
戸名所花暦』（一八二七年）にも出てく
る大変古い花園で、梅をはじめ草花が豊
富なところだ。江戸っ子たちは季節の花
や自然の景観を求めてさかんに近郊ツア
ーに繰り出したが、向島百花園もそのひ
とつ。江戸時代の人びとの活気ある暮ら
しがしのべる場所である。

農「江戸

江ゆ JA 世界野でも農業江戸

江暮 JA 多摩町、多形農業

練 練明業、

日花 伊「初

大田 松第百明

装印